

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#006(川瀬) (2022/06/01 uploaded)

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#006(川瀬) (23:31)
(2022/06/01 uploaded)



**Research
Announcements**
#006

理性と信仰の一致を見出すヌーソロジー 後半

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 川瀬 統心

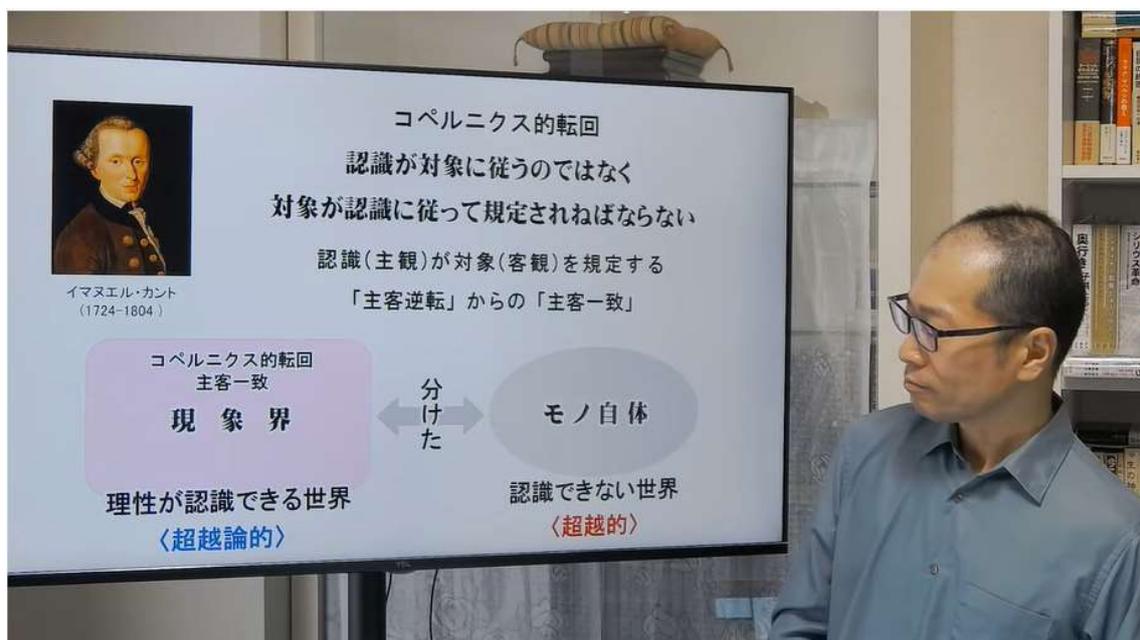
理性と信仰の一致を見出すヌーソロジー 後半

川瀬 統心

デカルトによって定義された心身二元から始まって主客分離の問題。それがカントによって調停されたと言われます。大陸合理論とイギリス経験論の流れも、このデカルトによって調停された。それが有名な「コペルニクス的転回」。コペルニクス的転回とは、カントの言葉で「認識が対象に従うので

はなく、対象が認識に従って規定されねばならない」と。つまり、認識という主観。普通は、外側の事物から来る感覚。対象から来る、その刺激を受けて、こちらの主体が認識するというのが普通の捉え方、ごく普通の常識的な捉え方であったのに対して、カントはそれを逆転させて、この認識主体の方のこの主観の方がむしろ対象を規定していると。つまり、外の事物のその世界は、むしろ主観が作り出しているんだと。対象や客観の世界を主観が作り出していく。つまり、主客逆転をするわけですね。そして、主客逆転をすることによって、目の前の表象を認識しているものと認識されているものが一致するという主客一致の方向を打ち出した。

ここにおいてデカルト以来の主客分離の問題、あるいは、合理論と経験論の問題が一致していくことになるわけですが、このカントの思想の根底にはこういう考えがありました。カントはそもそも、理性が認識できる世界と理性が認識できない世界を分けたのです。そして、理性が認識できる世界が「現象界」、表象とか現象の世界に対して認識できない世界・領域を「モノ自体」と名付けて、それを明確に分けたのです。そして、カントの言うこのコペルニクスの転回というのは、この現象界、理性が認識できる世界において、その限りであるという主客が一致して、主観が客観を規定しているという、そのようなカントの認識論がここで展開されるわけですね。二つを分けたわけですね。



このことによって、ある意味理性の限界を示した。理性は、こちらのように認識できる世界と認識できない世界があるわけだから、ということは理性が認識できない世界を、理性で考えるということは無意味なことだからもうやめましょうというわけですね。それに対して、理性は、理性が認識できる世界を明確にしていくべきで、そして、この理性が認識できる世界は、この認識が対象を規定している。この外の世界だと思っていた時間と空間ですら、この私たちの内側にある感性の形式としての直観の形式としてですね。認識の形式として規定しているんですね。それゆえ、そこにおいてですね。理性がどこまでも認識できるという理性の力を限定しつつ、ここにおいて拡張していくわけですから、

しっかり確立していくわけですから、そこは合理論の考え方でもある、ということで、経験論、理性の限界を主張した経験論と理性の万能性を主張していく合理論が、ここにおいて合致していくわけですね。ところが、ここにおいて分けてしまった、この「モノ自体」ですね。

カントにおいては、このモノ自体が超越的なものということで、理性が及ばないものですからね。超越的なもの。それに対して、こちらの理性が認識できる世界。この枠組み全体。こちらに対してカントは超越論的と呼んだんですね。超越的に対して超越論的。ここからカントの哲学、超越論的観念論という、カントの哲学が展開していくわけでありませう。

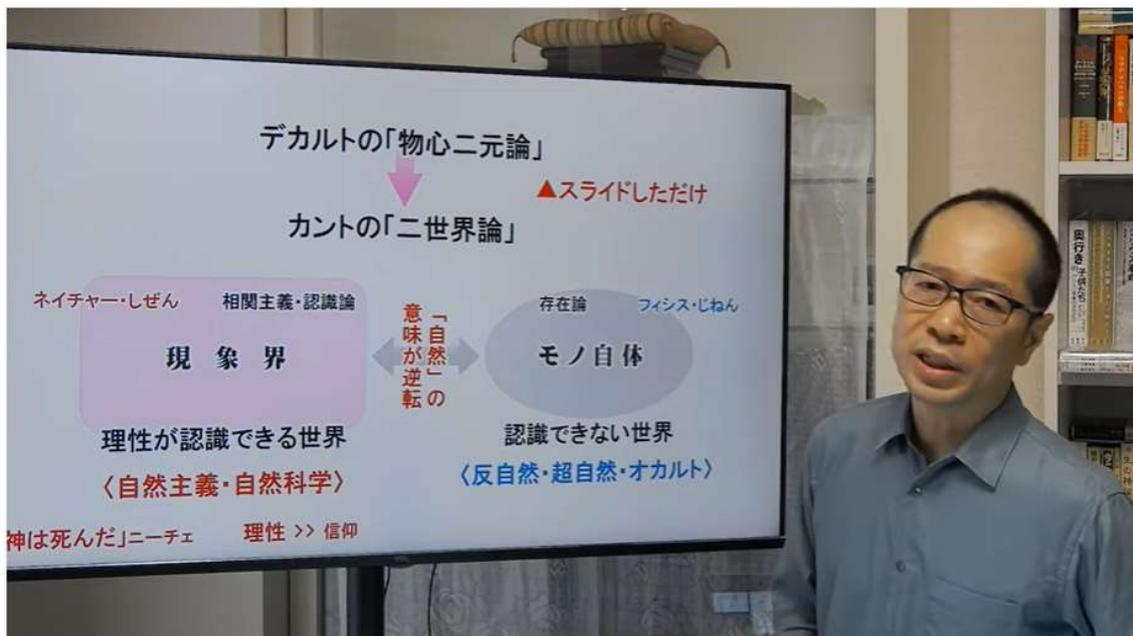
さて、デカルトの「物心二元論」。精神と物質をデカルトが分けることによって、内在と外在の不一致の問題、物心がどうやって相関性を持つのか物心問題、二つに分かれてしまった主客が分離してしまった、この流れをカントが統合したということなんですが、実は実はよく見ればカントは、デカルトの物心二元論がカントにおいては、そのまま「現象界」と「モノ自体」という「二世界論」にスライドしただけであるということが言えるのではないかと思うのです。二元論が決して解決されたわけではないんですね。ここにおいて、二世界論にスライドしただけであるということですね。そして、ですね。そうあまりにもカントのこの現象界、理性が認識できる世界の定義が明確かつ非常に説得力があり、厳密で見事に構築されたものであったがゆえに、その後の学問が多くの人の賛同を得てしまったわけですね。それで学問はこうあるべきだと。学問は(「現象界」を指して)ここを探求すべきなんだと。科学もそうだし、そして哲学も(「現象界」を指して)そちら側になびいていくようになるんですね。もちろん(「モノ自体」を指して)こちら側を探究する哲学もあったわけですが、やがて、(「現象界」を指して)こちら側がどんどん勢力を増していきます。そして、あろうことか(「現象界」を指して)こちらを明確に研究していく、その方向性が、自然主義、あるいは、自然科学と、こちらをですね探究していく態度が自然主義の態度と言われるようになって、そして、理性が認識できない領域に関しては、なんと反自然、あるいは、超自然、あるいは、オカルトと言われるようになってしまったと。よく心霊研究とか死後の世界とかを研究しようとしたら、超心理学という言い方をしますが、そのように自然を飛び越えている超自然現象ということですね。つまり、理性が認識できない世界のことが超自然というレッテルを貼られるようになってしまったわけです。

そして、超自然・反自然に対して、自然主義的な態度、あるいは、自然科学(natural science)と言われるものは、理性が認識できる世界において、きちんと第三者が誰が見ても再現可能な、そういう実験や、データを集めたり、そのような態度ですね。そちらが自然科学的な態度となってしまった。つまり、こういうことですね。自然の意味が逆転してしまったわけですよ。つまり、(「現象界」を指して)こちら側が英語で言うところの nature ですね。自然に対して、(「モノ自体」を指して)こちら側がネイチャーよりも以前の古代ギリシアの、あるいは、日本においても、そうですが、自然と人間が決して分かれていない、一体となった、そのような感性の中における自然ですね。フィシスとか、あるいは、日本語で「自然」(じねん)という言葉が適当かと思うんですが、自然(じねん)の領域ですね。

それに対して、「現象界」を指して)こちらは人間の観察対象、人間の操作対象としての自然というものになってきた。自然の意味がなってきた。よくよく考えてみたら、全く自然の意味がここで逆転してしまっただけですね。「現象界」を指して)こちらの方が自然だということです。ここで「あれ？」(「現象界」を指して)こちらの方が人工的で、「モノ自体」を指して)こちらの方が自然じゃないのか、自然界の方が神秘であるんですね。という、そういう感覚を持っておられるとしたら、それは極めて正常であると思うんですね。でも、実際、事実、そうじゃないですし、いつの間にか逆転していき、「現象界」を指して)こちらが隆盛を極め、現在はどのようなことになっているかと言うと、こちら側の言語を認識するような言語哲学とか分析哲学とか。そして、この存在そのもの、こちら側を追っかけるような哲学は衰退していくという流れを作り出してしまった。「現象界」を指して)これが近現代。それゆえ、こちら側においては、やがて、科学や技術、科学技術が暴走していくということになりますよね。

つまり、信仰よりも理性がついに勝ってしまい、さらに理性が巨大化し、今度は理性の暴走が始まってしまったわけです。私は信仰の方が墮落しやすいって言うようなことを先ほど言いましたが、ここからカント以降は、むしろ理性の方が墮落し暴走してしまった。神秘的な理性が認識できないという世界をバツサリ切り捨ててしまうというようなことが起きてきたということです。これを、あのニーチェの言葉で言えば「神は死んだ」というニーチェの言葉がありますが、このように感覚の鋭い人たちは、もう既にこの行く末にどのような未来が待っているのかということもうわかってたわけですね。ニーチェにおいては100年後、200年後に、こちらが隆盛を誇って、大変なことになってしまうということを、おそらく直感していたのでしょう。それが彼の「神は死んだ」という言明だろうと思いますし、あのゲーテなんかもそうですね。文豪ゲーテなんかも、この行き過ぎた科学の方向性がどのような結末迎えていくのか？ 本当の意味での自然界から人間が離れて、どんどん心を失っていくような方向に行くということを感じ取っている方は、たくさんいたのではないかと思います。それでも、こちらが自然科学の方が隆盛を誇って、意味は逆転し理性が暴走して、現代に至ったという流れではないかと思うのであります。

(「現象界」を指して)こちら側の認識できない領域が反自然とかひっくり返ってしまったということなんです。オカルト扱いされてしまったと。「モノ自体」を指して)こちらはそうですね。「現象界」を指して)こちらは、現代の新しい思想の主流において、新実在論ということが言われ始めています。現代の若手の哲学者カンタン・メイヤスーとかマルクス・ガブリエルとかという方々が登場してきておりますが、そういう方々によって、このような反省は既になされてきているわけですね。それで、このカント由来の、こちらの見方を相関主義だとか認識論の領域ということが出来ます。相関主義とか構築主義とか言い方をしたりしますが、それに対して、伝統的にこちらを追っかけていこうとするのが存在論哲学なわけですが、「モノ自体」を指して)こちらが非常に肩身の狭い思いをしてきた流れであった。



そのような中で、いよいよ本日の話の結論になっていくわけですが、ニューソロジーはどのような立ち位置かということなんです。

このようにカントが2つに分けてしまった理性が認識できる領域とできない領域の時代。この2つの分離において、ニューソロジーをこの両方の世界を、両方の領域を認識できる視座を生み出そうとする思想・哲学であります。さらに、ニューソロジーは、ここに「人間の内面」と「人間の外面」、カントが見出した、この現象界、理性が認識できるとされる領域、カントが見出した領域がまさにこれは人間の内面に相当すると私は思っております。そして、カントが認識できないとした領域、モノ自体、その領域がそのまま、ニューソロジーにおける人間の外面の方向性であると思われます。そして、この人間の内面と人間の外面を、幾何学的なカタチとして抽出しようとする、あるいは、抽出してきているのが、まさしくニューソロジーなんです。幾何学的なカタチであります。この形という認識力を持つことによって、この理性が認識できないとした、この世界「モノ自体」に理性が進入することができる。そのような、ある意味奇跡のようなことが起きる。ここがニューソロジーの非常に面白い斬新かつ可能性がある、そういうニューソロジーの領域ではないかと思うんですね。そこにおいてここにもニューソロジーは幾何学的なカタチの中でも、ニューソロジーを代表する幾何学的概念といえるのがやはり反転ではないかと思うんですね。

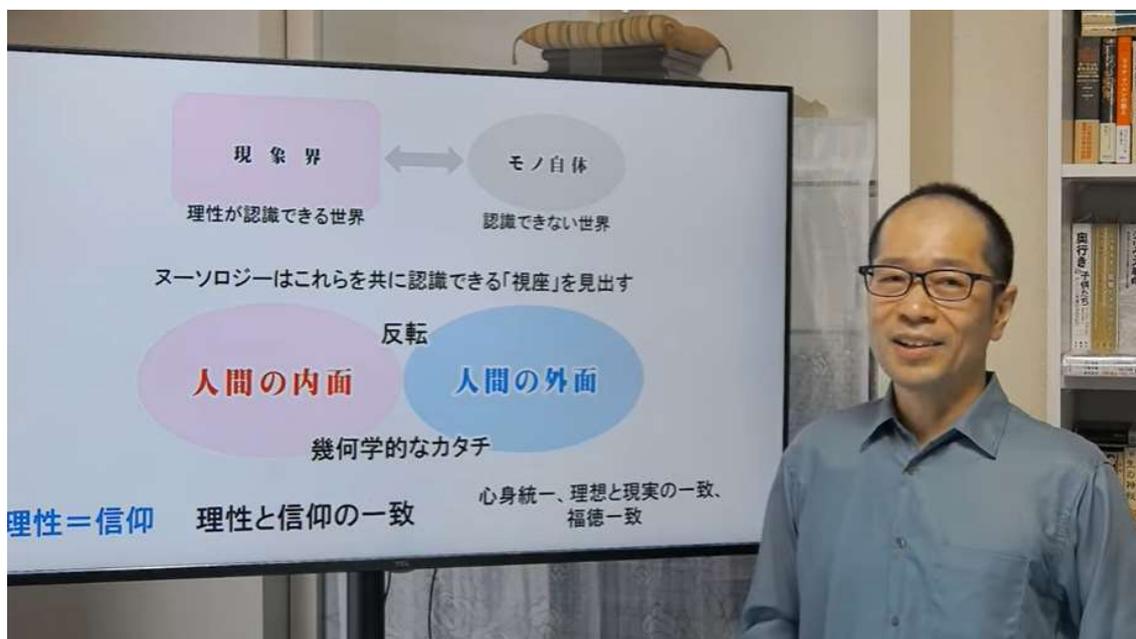
これ今ここに、赤色の人間の内面と、青色の人間の外面という領域を描いておりましたが、これは決して、これ一つの画面に2つの円として描いてしまっていますから、これは反転関係ではないんですね。これは反転という言葉の意味を、表面的に表しているだけであって、あくまでも、そういう象徴的に言ってるだけであって、反転というのは全くそうではないわけですね。もっと構造的に反転するという、非常にこの今までの理性の認識力を超えた、新しい認識システムを打ち出していく。そのよ

うな契機とか反転認識というものが、ニューロロジーにおいては設定されていくわけです。

それが今までカントにおいては認識できないとあきらめられたこの「モノ自体」の世界、神秘の世界が認識できる可能性が表れてきたということ。ここがニューロロジーの面白いところではないでしょうか。この文脈の中でニューロロジーは虚数という問題。数学的に今までは単なる観念、あるいは、想像上の数と言われてきた「Imaginary number」と言われてきた虚数も、ニューロロジーにおいては、明確に認識できるカタチとして描像されてきます。そして、それもまた、この認識できない世界に進入していく重要な手がかりになっています。そして、半田広宣所長においては、ここに素粒子の描像、素粒子のカタチを描像すると、素粒子を見出すということで、現代物理学における素粒子の描像を達成することができれば、人間が明確に素粒子描像を認識することができれば、それは人間の意識が、認識がこの「モノ自体」への進入をいよいよ果たすことができる。「モノ自体」への進入を達成することができるというカント以来の問題を乗り越えることでもありますし、それは遡ってデカルト以来ずっと分かれてきた精神と物質の問題を統合していく、そのような可能性がここに見出されるのではないか。そのような可能性と期待を持って、日夜探求しているのがニューロロジーであるということでもあります。

そして、私はそこにきょうの文脈でずっと見てきましたが、まさしく理性と信仰の一致がそこにもたらされてくる。信仰でしか置け切ることができなかつた、この見えない世界、「モノ自体」、神とか死後の世界とか魂とかといった神秘的な超越的な世界も、理性が明確に認識できるようになるとしたら、どうでしょうか？ それは理性と信仰の一致を生むというふうになります。そのようにして表れていった信仰というのは、既にかつての信仰ではない。ある意味、このそのような理性と信仰が一致したということは、既存の宗教はすべて役目を終えるという言い方もできれば、本当の宗教が現れるという言い方もできるでしょうし、既存の科学は一つの役割を終えるという言い方もできれば、本当の科学が立ち現れてくるという言い方もできるでしょう。つまり、ここにおいて、デカルト以来の近現代を作り上げてきた、人間というものが全く別の認識力を持つことによって、これはもう今までの人間の連続性では語り得ない、新しい人間の始まりにもなるのではないかと、私は思っております。まったく別の人間が現れるということですね。それぐらいの可能性がここにある。この「モノ自体」に進入できる認識力を持つということは、それぐらいの可能性を秘めていると思いますし、そこにおいて理性と信仰が一致し、そこにおいて分離していた心と体が統一される心身の統一、そしてそれは人間個人においては理想と現実、それは人間個人だけじゃなくて、個人が集まった社会においても、理想と現実のギャップというものが統合されていく。そして、福德一致、すなわち、このような知識を持っていることと、実際の生活における幸せがまったく別のものだとしたら、それは空しいことではありません。そうあってはなく、そうであるということはそれは正しい知識ではないという、このプラトン以来のそういう言明がありますが、真の知識を得る者は同時に真の幸福を得ると言う福德一致がそのまま実現されると、私は睨んでいるのであります。

このような問題意識を持って、今後またヌーソロジーを探究していきたいと思います。これからまたいろいろ発表させて頂きたいと思いますので、今後とも引き続きよろしく申し上げます。長いお付き合いになると思いますが、どうぞよろしく申し上げます。これをもって、第1回目の私の発表をの終わりにしたいと思います。ありがとうございました。(23:16/23:31)(了)



**Research
Announcements**
#006

理性と信仰の一致を見出すヌーソロジー 後半

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 川瀬 統心

(出典:【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#006
<https://www.youtube.com/watch?v=7oj8GDSWVyk>)